



こいたろうの
ぼうけん



たなかいつけい

こいたろうのぼうけん

こどもの日です。いい天気です。五月の風がこちよく吹いています。こいのぼりのこいたろうは、晴れあがった空のしたで、きもちよく泳いでいました。ときどき、つよい風が、たつまきのように下からホコリをまきあげ、こいたろうのからだをくるくると回しました。

家々のやねのむこうには、とおく山々が見えます。

「あの山のむこうは、どんなところだろう」こいたろうはそんなことをかんがえていました。

「あの山のむこうへ行ってみたいなあ」

「こいたろう、元気だったかい」

一羽のカラスが、家のやねのてっぺんにとまって言いました。

「やあカラスさん、ことしも会えたね」こいたろうがこの家へきて、さいしょにともだちになったカラスでした。

「カラスさん、あの山のむこうにはなにがあるのか知ってるかい」

「知ってるとも、あの山のむこうには港があって、その先は海だ」

「海ってなあに」

「そうか、海を見たことがないんだったな、海ってのは、塩っからい水の、ひろいひろい水たまりだよ」

「この町よりひろいのかい」

「そうだ、なんばいも、なんびやくばいもひろいさ」

こいたろうはまだ見たことのない海へいってみたくなりました。

とつぜん、つよくておおきな、たつまきがおこりました。ロープがきれて、こいたろうのからだは、空たかくまいあがりました。はるか下に家々のやねが見えます。こいたろうは、たつまきにつれられてどんどん山へむかってとんでいきます。

「おーい、こいたろう、だいじょうぶかあ」カラスが、さけびながらおいかけてきました。

「いまのところ、だいじょうぶのようだよ」こいたろうはカラスにむかってさけびました。

山のふもとを一本の川がながれています。川の上まできたとき、ふっとたつまきは消えてしまいました。こいたろうのからだは川にむかってゆっくりと落ちていきます。川がだんだん大きくなります。

じゃぼーん、川に落ちたこいたろうは、そのまま川のながれに、ながされていきます。水のなかは陽のひかりが射しこんで、キラキラとかがやいてみえました。

「このあたりでは、みかけないやつだなあ、どこから来たんだ」

岩のかけから、ますが声をかけました。

「ぼくは、こいのぼりのこいたろう、町からきました」

「へーえ、こいのぼりなんてさかな、はじめてだなあ、変なかつこうだけど、いちお

う、さかなのかっこうはしているな」

「きみの泳ぎかたは、かわってるねえ」もう一匹のますが言いました。

「ほんとだ、泳いでるのか、ながれているのかわからない」

「だって、水のなかっちはじめてなんだもの」

「さかなのくせに、水のなかがはじめてなんだって？ いままでどこにいたのさ」またべつのますが言いました。ますのなかまが何匹もあつまってきました。

「空を泳いでいたよ」

「へえー、かわってるねえ、それでどこへいくんだい」

「それがわからないんだよ、この川はどこまでいくんだろう」

「川の終ては、海にきまつてるよ」

「え、海だって、ぼくは海へいきたかったんだ。ぼくは海へいくよ、おしえてくれてありがとう、さようなら」

「気をつけて行くんだよ」

ますたちはみんなで、こいたろうをみおくってくれました。

川の流れにそって泳いで行くうちに、川はだんだん広くなってきました。

「海はまだ先でしょうか」ちょうど浅瀬をあるいていた、かわえびの親子にきいてみました。

「ああ、海はもうすぐだよ、水が塩っからなくなってくるから、すぐわかる」

「ありがとう」

しばらく行くと、かわえびが言っていたとおり、水が塩っからなくなってきました。

まわりのけしきが、とつぜん変わりました。ふかいところに、見たこともない植物がゆらゆらとたくさんゆれているのが見えました。よく見るとそのまわりに、いろんな、すがたかたちのさかなたちが泳ぎまわっています。こいたろうは深いところにいるさかなに聞きました。

「ここは海ですかあ」

何匹かのさかなが、こいたろうにむかって

「そうだ、ここは海だよ」

ついに、こいたろうは海についたのです。海の底はとおくへ行くほどふかくなっていそうです。左右を見わたしても、川のように岸がありません。どこまでもどこまでも海はひろがっています。それでも海にも流れがあるようです。こいたろうはあたたかい流れにそって泳いでいきました。

「やあ、かわったさかなだなあ、ぼくはイルカのリュウ、きみのなまえはなんていうの」ちかづいてきたイルカはそういいながら、いっしょにおよぎはじめました。

「はじめまして、ぼくは、こいのぼりのこいたろうです」

「こいのぼりなんてさかな、きいたことがないけど、よろしくね」

「この先は、どうなってるんだろう、ぼく海ははじめてなんだ」

「海がつづいているのさ、海はものすごくひろいんだよ、きみはどこまで行くつもりなんだい」

「わからないけど、もうすこし先まで行ってみるよ」

「それじゃあ、ぼくはかえるよ、気をつけて行くんだよ、さよなら」
イルカのリュウのすがたが見えなくなると、こいたろうはこころぼそくなってきました。あたりは暗くなりはじめていました。

「家にかえりたいなあ、でもどうやったらかえられるんだろう」ひろいうみを泳ぎながらそんなことを考えていました。

「どけどけ、ぶつかっちゃうじゃないか、のろのろしてるんじゃないよ」とつぜんうしろから大きな声がしました。まぐろのむれでした。まぐろたちはすごいスピードでこいたろうをおいこしていきます。

「そんなにいそいで、どこへ行くんですか」こいたろうがきくと
「行くさきなんかわからねえ、とにかくおれたちやあいそがしいんだ。ついてきたけりやあ早く泳ぎな、おいてっちゃうよ」

こいたろうはむれについていこうと、いっしょうけんめい泳ぎました。

きゆうに、まぐろたちがとまってしまいました。こいたろうはすぐまえを泳いでいたまぐろにぶつかってとまりました。みると海のなかにひろい網がひろげられていてまぐろたちはその網にぶつかってしまったのでした。

網は漁船にひきあげられました。

「やあ、なんだ、こいのぼりがひっかかっているぞ、こりやあめずらしい」
漁師のおじさんが、こいたろうを網からはずして言いました。

大漁旗といっしょにマストのさきで泳いでいる、こいたろうのからだは、潮風ですっかりかわいて、朝日をあびていました。

やがて港へかえてきた漁船は、仕事を終えて眠りにつくのでした。

そのまえに漁師のおじさんが、大漁旗とこいたろうをマストからおろして、網を干す物干しにひっかけました。

こいたろうは港のようすをみわたしました。朝の市場のにぎやかさにうってかわって、午後のまどろみのなかで港ぜんぶがねむっているようでした。

「あっ、カラスさん」一羽のカラスが、こいたろうのほうにふりむきました。

「あっ、こいたろう、ぶじだったのか。ずいぶん心配したぞ」

「カラスさん、ぼくを家までつれていってくれませんか」

「ああ、いいともさ」カラスはそういうと、こいたろうをつれてとびあがりました。港がちいさくなり、山をこえて、みなれた家々の、やねがつづく町のうえにきました。

「家が見えた。カラスさんありがとう」

こうして、こいたろうのぼうけんは、終わったのでした。

